

弘前における洋楽受容のはじまり Beginning of Acceptance of Western Music in Hirosaki City

安田 寛* ・ 北原かな子**
Hiroschi YASUDA ・ Kanako KITAHARA

論文要旨

明治期日本における洋楽は、軍隊の音楽、宣教師達による讃美歌、学校教育の音楽という順で普及した。津軽地方弘前は、この三つそれぞれの導入に関する史料が比較的多く残されている地域である。特に讃美歌に関しては、明治五年に開学した私学東奥義塾で明治八年から宣教師夫人によって女子教育が行われ、さらに同八年に組織された弘前教会の設立者である本多庸一が、日本最初の讃美歌集編纂に携わっているなど、一地方としてのみならず、日本での洋楽受容過程を考察するうえでも非常に示唆に富む地域と考えられる。本稿では、最初に弘前の軍楽導入について述べる。ついで、東奥義塾に現在に至るまで残されている讃美歌集を検討するとともに、東奥義塾女子小学科での教授内容や明治十年の弘前教会日曜学校の様子など、これまでほとんど知られていなかった明治初年弘前での洋楽導入の様子を明らかにする。

キーワード：洋楽受容史，女子教育，東奥義塾

はじめに

明治のはやい時期からアメリカプロテスタントの布教活動が熱心に展開された地域である。これに加えて、学校についても明治初期の記録が保存されている。さらに比較的是やい時期に軍楽隊の活動も見られる。もしも、そのような地域があれば、洋楽受容史にとってこれほど都合のいい地域はない。かつての津軽藩の城下町、弘前は事実そういった地域であった。伝統音楽に代わって洋楽が人々の間に普及していったのはなぜか、この未解決の問題を解くカギは地方史が握っている。その中でも最も期待されるのが弘前の洋楽史である、というつもりでこの小論は書き始められた。

なお、この共同研究のきっかけを作って下さった、元弘前大学教育学部教授、笹森建英氏にお礼を述べさせていただきたい。

研究史

弘前、あるいは津軽の洋楽については、すでに優れた研究が蓄積されている。年代順に言うと、笹森建英、今井民子両氏による「地方に於ける洋楽の普及—明治期の弘前市における唱歌

* 弘前大学教育学部音楽科教室

Department of Music, Faculty of Education, Hirosaki University

** 東北大学大学院国際文化研究科博士課程

Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku University

教育一」と「明治期の和徳小学校の唱歌教育」、北原かな子による「明治期における洋学受容の過程—津軽を中心に—」の中の「第四章 2. 西洋音楽の普及」の部分である¹⁾。

最初の論文は、洋楽の浸透を、キリスト教の音楽、軍楽、社会一般と個人による音楽、学校教育に於ける音楽という四つの様相によって捉え、明治期に於ける弘前の洋楽普及の過程を詳細にたどった優れた研究となっている。二番目の論文については、要旨に述べられている「弘前市立図書館所蔵の『和徳小学校資料』にもとずき明治期の公立小学校の唱歌教育の実態を検証する」に言い尽くされている。和徳小学校というのは、明治六年十二月に弘前で二番目に開設された小学校である。地方の小学校の唱歌教育の実態をつかむことがなかなか困難の状況の中で、この論文は例外と言えるほどそれを詳細に跡づけている。三番目のものは、前記論文の共著者である笹森氏の助言を受けながら書かれており、幕末の画家、文人の平尾魯仙の洋楽の受けとめ方から筆を起し、東奥義塾に於ける讚美歌の受容、さらに、東奥義塾初の米国留学生珍田捨己に憧れて明治三十年代にアメリカに留学し、声楽、作曲を学んだ水木音弥の事歴を紹介している。

拙論はこれらの先行研究に多大の恩恵を受けながら、弘前の洋楽受容史の初期の段階について、二、三、新しい知見を書き加えるものである。

軍楽

津軽で最初に洋楽を聴いたであろうと思われる人物に平尾魯仙がいる。一八〇八年文化五年に弘前で魚屋の息子、つまり町人として生まれた魯仙であったが、三十歳で家督を弟に譲り、学問と画業とに専念するようになった²⁾。函館のペリー艦船から漏れ聞こえる音楽を聞いた魯仙はその印象を「蛮船のうち日々申の下刻より黄昏の時黎、笙箏、笛太鼓の音あつて管弦といふものごとく、其韻甚清亮なり」³⁾と記している。

ペリー艦隊で軍楽隊を乗せていたのはサスケハナ号とミシシッピ号であった。その軍楽隊の音と比較するものとして魯仙には雅楽の管弦しかなかったということであろう。「清亮なり」と彼の耳にすがすがしく聞こえたのが何の楽器の音であったのか、はっきりしないが、サスケハナ号とミシシッピ号に乗船していた楽隊の編成は、小太鼓、シンバル、フルート、ホルネット、それにオーボエ、クラリネットであったようである⁴⁾。

魯仙がさわやかな楽隊の音を聞いた函館は、やがて居留地となり、ハリストス正教会、アメリカプロテスタントメソジスト派教会などが布教活動を展開し、それによって函館は、聖歌、讚美歌という西洋音楽が日本に浸透する北の拠点となる。

一方、弘前藩も幕末期になると、藩士の洋式の練兵をはじめた。たとえば文久二年二月には、「江戸に於て諸士に銃隊の操練を奨励す」⁵⁾とある。

幕府がフランスから軍事顧問団を招き、幕府陸軍に信号ラッパを教育したのは、一八六七年のことであった。教えたのは、顧問団の中のラッパ手ギュティグ伍長であった。彼は、音符の種類と長短を教え、五線譜で号令用の短い譜を教えた⁶⁾。

時代は下って、明治二年六月十五日、弘前藩主津軽承昭は、東京に向けて弘前を発った。従った七十人の中には、「笛太鼓喇叭の楽手附随す」⁷⁾とあるので、幕末の弘前藩にも、鼓笛隊、幕府にならったフランス式軍事訓練に必要なラッパ手がいたことが分かる。

『弘前市史』によると、弘前藩では明治二年「九月九日青森にいた箱館降伏人林鑄三郎・大塚浅五郎方に、英学生工藤勇作・青山伴蔵・三浦良太郎の三名を遣わし音楽を稽古させることに

定めた」⁸⁾。函館で榎本武揚らが降伏したのは明治二年五月十八日のことであった。大鳥圭介が率いる伝習隊や額兵隊には、多くのラッパ手がいた⁹⁾。青森の蓮心寺、蓮華寺の降伏人名簿には伝習隊ラッパ手の岩本龜吉の名前が見えている¹⁰⁾。弘前藩の英学生三名は、青森の蓮心寺、蓮華寺にいた函館降伏人からラッパの伝授を受けたものであろうか。箱館降伏人林鑄三郎・大塚浅五郎というのはラッパ手ギュティッグ伍長からフランス式陸軍の信号ラッパの伝授を受けた者たちであったのであろう。

また翌明治三年七月八日、同藩では兵制を改革することにし、「七月二十日、先是、佛式陸軍操法を練習せしめん為め、旧幕臣吉野芳次郎及喇叭手六名を教師として雇聘し、此日開業す」¹¹⁾ということになった。訓練生の寮の日課表を見ると、「毎朝第四字警起之喇叭」から「夜第九字着寝喇叭、但相凶喇叭にて燭消すへき事」まで、すべてラッパの合図で課業が進行している¹²⁾。この六名のラッパ手の名前は、矢吹恒蔵、白井悦三郎、大内四郎吉、三宅恒三郎、松尾慎堂、服部泰次郎である¹³⁾。ギュティッグから伝承を受けた者の氏名については史料がない¹⁴⁾。ギュティッグが日本を去ったのは、明治と改元される数日前、慶応四年九月一日（一八六八年十月十六日）であった。明治三年に弘前藩が招聘した六名のラッパ手がギュティッグに直接習ったものかどうかは断定できないが、ギュティッグの教えた奏法を受け継ぐ者であった、と考えて間違いのないであろう。幕末明治の戦乱によって、幕府が一八六七年にはじめた信号ラッパという洋楽の教授が明治三年には弘前にまで伝わっていったのである。

明治四年七月十四日の廃藩置県により、「十月四日、佛式兵術伝習教師吉野芳次郎及喇叭教師を解雇」¹⁵⁾となった。ラッパ教師六名は十月十五日、練兵教師吉野芳次郎と共に弘前を去ることになる¹⁶⁾。この時までにはラッパの訓練を受けた者の数は「古喇叭 廿五」「新喇叭 廿一」¹⁷⁾の総勢四十六人となっている。この「古喇叭」「新喇叭」とは、同年四月二十二日に「教師吉野芳次郎に就きて佛蘭西式銃操術を修行せし士官伝習生成業したるを以て、更に予備兵の内より年齢十九歳已上三十歳に至る八百四十人（八小隊外に喇叭生二十一人）を大星場仮屋に入寮練習せしむ」¹⁸⁾とあり、この八百四十人の新入寮生のうち喇叭生は二十一人であったというから、おそらく彼らが「新喇叭 廿一」で、四月二十二日に伝習を終えた喇叭生が、「古喇叭 廿五」であるのであろう。また、この廃藩置県の後、十月には全国に四鎮台が置かれ、仙台の東北鎮台の二番大隊の分営が弘前の旧城に置かれ、これにはフランス式訓練を受けた者たちが選抜されて当てられた¹⁹⁾。

明治五年十一月に弘前藩藩校の後身として設立された私学東奥義塾の、二代目外国人教師として招聘された青年マックレーが、弘前にやってきたのは明治七年春²⁰⁾のことである。彼は後に弘前城で鳴り響いたラッパについて次のように回想している。

この周辺で、僕に文明を思い起こさせるのは、お城くらいのもです。朝、正午、夕暮れと一日三回城内に鳴り響く軍用ラッパの生き生きとした音は、なにかしら僕の心を奮立たせるものがあります²¹⁾。

東奥義塾

弘前市を観光するとき、必ず案内されるのが、弘前城のお堀端にある旧東奥義塾外人教師館の建物である。東奥義塾は開学当初から外国人教師を招聘し、洋学教育に力を入れた学校であった。観光パンフレットによれば、この外国人教師の宿舎は、「明治三十二年に焼失し翌年の同

三十三年に再建された」となっている。中に入って一通り見学すれば、当時のアメリカでもおそらく豊かといえる暮らしができるほどの建物であることが実感できる。この実感こそが、東奥義塾が外国人教師にどれくらい期待を寄せて厚遇していたか、について理屈抜きの証拠となる²²⁾。東奥義塾が最初に招聘した外国人教師は、名前をヴォルフというオランダ改革派派遣の宣教師であった。次に前出のマックレーが在職し、その後任としてメソジスト派宣教師であったジョン・イングが弘前に向かうため夫人と息子を伴って横浜を出発したのは、一八七四年十一月二十三日正午のことである²³⁾。バスカムの伝記では、弘前までの旅程は遅速の蒸気船と陸路駕籠による三週間とあるが、イング一行の到着日を十二月二十二日と推定するものもある²⁴⁾。

本多庸一と初期讃美歌翻訳について

イングに同行し、東奥義塾の塾頭あるいは塾長として重きをなす本多庸一の談として、オルチンは次のようなエピソードを紹介している。

バラ氏が“Jesus Loves Me”を翻訳したが、5, 6人がそれを批判, 検討して原型をとどめぬほど改作した。その内の一つの形は『エスわれを愛す, 左様聖書申す』であった²⁵⁾。

本多は横浜で讃美歌の最初期の翻訳に関わった一人である。「植村は本多が『詩の八衝』などいふ書を繙いて歌を考へたり、讃美歌を訳しなどし居るを見てその文才を認めた²⁶⁾」という。

現存するメソジストの最も古い讃美歌集は、神戸女学院オルチン文庫所蔵の『讃美のうた』で、明治七年に出版されたと推定されている²⁷⁾。もう一つは、コーネル大学所蔵の『讃美のうた』で、これも明治七年に出版されたものと推定される²⁸⁾。オルチン文庫所蔵本では、第一番「われたるいはや (Rock of Ages)」と第十七番「かみわがしろなり (God is the refuge of His saints)」がバラと本多の共訳となっている²⁹⁾。コーネル大学所蔵本では、第一番「われたるいはや (Rock of Ages)」と第十六番「ぜんおんのしんをほめよ (Old Hundredth)」がやはりバラと本多の共訳となっている³⁰⁾。

ところで、現在、東奥義塾高等学校が所蔵している一番古い讃美歌集は、『讃美歌一』である。これはメソジスト派が二番目に出版した讃美歌であるが、オルチン文庫に所蔵されている讃美歌集と照合した研究の結果、明治十年に出版されたものと推定されている³¹⁾。ただし、復刻されたオルチン文庫版には、乱丁がみられ、巻末の五線楽譜の「一 I will sing Jesus」と「二 None but Jesus」が印刷された丁が「五」と「六」が印刷された丁と入れ替わっている³²⁾。これに対して東奥義塾高等学校版にはそのような落丁はみられない。従ってこの東奥義塾高等学校版は、今のところ、明治十年にメソジスト派によって出版されたと考えられる『讃美歌一』の唯一の完全版である。この讃美歌集の裏表紙には、「山田源次郎」との署名があるが、彼は、明治十年四月十五日、弘前教会でイングより洗礼を受けている³³⁾。

最初の受洗

イングが着任する以前の東奥義塾で讃美歌が歌われていたかについては、はっきりしないが、讃美歌の歌唱を記録で確認できる最初のもは、明治八年六月六日の最初の洗礼式記録である。

『公会記事』によると、この日午前十時、イング宅に集まって洗礼を受けたのは十四名であった。この十四名は一人を除けば、すべて東奥義塾の学生であった。「一讃歌一曲にして『イング』

氏祈禱し」とあるように洗礼式はまず讃美歌を歌うことから始まり、「一諸式成りて後讃歌一曲」と、讃美歌を歌って洗礼式が終わっている。午後三時からの聖餐ではイングが聖書朗読したあと、「一讃歌一曲祈禱」し、最後に「讃歌一曲」を歌い、午後五時に散会した³⁴⁾。『公会記事』が「諸式成りて後讃歌一曲」と簡単に記録している部分に関して、イング夫人は次のように描写している。

洗礼式の後、いつもの通り閉会式を行ったが、「誰も帰ろうとはせず、同じように感動してみな席に戻った。聖霊がわたしたちと共にあり、感情があふれでていた。しばらくして、わたしたちは“Jesus, Lover of My soul”を歌った。一人の説教者の熱心な祈りが続き、祈りの間彼は感情に衝き動かされていた。多くの若者はまた涙を流していた」³⁵⁾

“Jesus, Lover of My soul”は明治七年十一月に出版されたと推定される、メソジスト派とオランダ改革派共用の讃美歌集『讃美のうた』では第十番に収録され、「エスわが霊の主」となっている³⁶⁾。コーネル大学所蔵本では同じく第十番「エスわがれいの志由」となっている³⁷⁾。

明治十年五月、西南戦争に出兵する前日にイングより洗礼を受けたという長谷川長吉の回想によれば、当時「用いられし讃美歌は小形の極く数の少ないものであつて、多く歌われたのは、けふ主がまねく、あゝエスあいす、われたるいはや、などであつた」³⁸⁾。この三曲は、『讃美のうた』でも、コーネル大学所蔵本でも、それぞれ第二番、第八番、第一番である³⁹⁾。第一番はバラと本多の共訳であることはすでに触れた。

第二回目の洗礼式は十月三日に行われ、この日、弘前教会設立式が挙行された。

天皇巡幸

明治九年に東奥義塾の名を世間に知らしめる出来事が起こった。

明治初年の大阪行幸、東京行幸をかわきりに、明治天皇は日本全国くまなく巡幸した天皇である。そのうち大規模のものは、明治五年の西国巡幸から数えて、明治十八年の中国巡幸まで六大巡幸として数え上げられているが、その二番目として行われたのが、明治九年六月二日から七月二十一日にわたった奥羽巡幸であった。巡幸は天皇を実感として知らない地方の人々に絶大なる威力を発揮したと思われる。各地方ではそれぞれに歓迎の行事が催されると共に、その様子は新聞記者達の巡幸記によって、新聞紙上に掲載された。例えば『東京日々新聞』の岸田吟香は、天皇一行が青森に差し掛かったとき、「鎮台分営より凡ソ一大隊ほど御迎ひに出て堵列式を行なひラーションの楽を奏し兵卒ハ捧銃の禮を」行ったと伝えている⁴⁰⁾。前述した軍楽の水準が、「ラーションの楽」をこなすほどであったことがわかる。そして翌七月十五日には、青森市蓮心寺において、東奥義塾生達による天覧授業が行われた。このときイングの指導下にあった学生達が、天皇の前で英文朗読をなし、英語作文を奉呈した。しかし、予定が全部終わらないうち、「還御の刻限に近づきければ悉とく果たすを能はず一同起て齊しく頌歌を唱へ以て祝詞に代へた」⁴¹⁾。

これはイングが讃美歌を天皇頌歌に翻案したものだという⁴²⁾。「清音洋々として梁塵を動かすべき趣あり」⁴³⁾と岸田吟香は伝える。また、『朝野新聞』では「英語学校教師米人ジ、イング生徒を率いて頌歌を誦したるよし」⁴⁴⁾とのみ、報じられた。東奥義塾の学生達自身にとっても、この時の出来事はよほど印象深いものだったとみえて、いわば伝説化した。この時の学生達の

後輩にあたる山鹿元次郎は、およそ五十年後の東奥義塾卒業式での祝辞の中で、「五十年も前に唱歌を以て御威を歌ひまつりし事は全国に於て東奥義塾が歌ひ始め」⁴⁵⁾であろうと誇っている。

この元の讚美歌が何であったか、気になるところであるが、英語の歌詞を翻訳したものというものだけが残されている⁴⁶⁾。

御威を祝へありとあらゆる人
 かしこみぬかづけ蒼草人
 かふりをさけよあがめまつれ
 凡ての王と

というのが一番の歌詞の翻訳である。歌詞の内容から推測して、コーネル大学版「教えのうた」第十六版「ぜんおんのしんをほめよ」の本歌“Old Hundredth”⁴⁷⁾がそれらしく思える。その歌詞は次のものである

地に住むすべての人々よ
 元気な声で主に向かって歌え
 喜びもって主に仕え、主を讚美せよ
 主のみまえに来てよろこべ

本多庸一がバラとともに「ぜんおんのしんをほめよ」を翻訳した⁴⁸⁾ことも推測を強めるが、確かなことは分からない。

日曜学校

弘前教会に『弘前教會日曜学費記録』が保存されてある。これは、一八七七年四月八日から翌年六月二日までの日曜学校の日誌である。弘前教会の日曜学校の経緯については、『弘前教会五十年略史』がよくまとまっているので引用する。

弘前日曜学校は、ジョン・イング、本多庸一の両師当地に来られ、基督教宣傳し始めた当初よりありたれども、学校組織となり居らず、校長書記もあらざりき。様々の点に不便を感じ、遂に明治十年四月八日校長に本多庸一氏、同補佐に佐藤愛麿氏。書記に伴野雄七郎氏。同補佐に古坂啓之助。書庫掛に田中五郎、同補佐に伊東基。教師にジョン、イング（第一英語聖書会読）本多庸一（第二邦語聖書会読）珍田捨己（第三邦語聖書会読）今規雄（第四邦語聖書会読）芹川得一（第五邦語聖書会読）の五氏を挙げ、此処に完全なる学校組織をなせり⁴⁹⁾。

この日曜学校の様子は、先に引用した長谷川朝吉によって次のように伝えられている。

此時代にて英語の出来る人達はイング牧師の組に、私達は先生（本多一引用者記）の組であった。ここに亦特色であったことは、講義を聞く前に各自思ひ々々に、聖書の何処か一二節を覚えて来て先生の前に夫を暗誦することであった。此時も組会のやうに車坐になり、一方より順次に暗誦するのであるが、するすると能く覚えて来る人もあるが、半ば覚えてあとは有や無やにする人もありて、随分滑稽なこともあったやうである⁵⁰⁾。

音楽で興味あることは、日曜学校の開始に先立って毎回讚美歌が歌われたことである。たと

えば最初の日の記録によると、「午前十時開会。校長本多氏祈禱す。馬太傳十九章誦読。頌歌一曲。校長本多氏祈禱す。頌歌一曲⁵¹⁾」となっている。讚美歌については、時には「衆起って同音に讚（さんびの）美を唱し⁵²⁾」とか「声をあけて頌歌を唱へけり。其の声講堂に響き、恰も御国の近けるか如し。神の御国の成るか如し⁵³⁾」という表現も見られる。弘前教会には「千八百七拾七季四月」と記載された『弘前教會日曜學校原書目録』があり、それによると、日曜学校が使用した讚美歌集は、「讚美の歌 グード タイディングス」五冊であった。

イング夫人と女子教育

明治十一年三月七日、イング夫妻が弘前を離れ帰国した⁵⁴⁾。帰国後も夫人の健康はすぐれず、明治十四年四月十五日ついに帰らぬ人となった⁵⁵⁾。その当時、東奥義塾からインディアナ・アズベリー大学 (Indiana Asbury University, IN, USA) に留学していたイングの弟子らは葬儀に参列し、佐藤愛麿が代表して弔辞を捧げた。その中で佐藤はイング夫人について次のように語っている。

イング夫人は男子ークラスと女子ークラスを無償で教えた。夫である牧師は福音を伝道したが、一方では夫人が静かに、親切な言葉や慈善の行為によって、キリスト教の何たるかを示すのであった。彼女は特に日曜学校に興味を持っていた⁵⁶⁾。

イング夫人、つまり Lucy Ing は、一九三七年九月二七日にインディアナ州ブルーミングタウンに牧師の娘として生まれた。一八五八年に、女性宣教師を多く生んだマサチューセッツ州マウント・ホリオークという名門女学校を卒業した。インディアナ州で教師をした後、一八七〇年六月三〇日にジョン・イングと結婚、秋には中国への宣教の旅に発った。宣教師は赴任の直前に結婚することがよくあり、イング夫妻もそのようなケースであったのであろう。イング夫人は結婚したときは後三ヶ月すれば三十三歳になるという年齢で、夫よりも三歳年上であった⁵⁷⁾。

東奥義塾に小学科女子部が設けられたのは明治八年四月であった⁵⁸⁾。東奥義塾の「小学課」は最初明治五年に設置されたが、財政難で明治六年にいったん廃止された。明治八年一月に再興され、四月に「女小学」が設けられたのであった⁵⁹⁾。文部省年報ではこの年の東奥義塾の女子生徒数は六十六名と記載されている⁶⁰⁾。

六月十五日のイング夫人の手紙⁶¹⁾によると、襖を開けはなつた三室を使って、幼いものから成長したものまでの二十人の女生徒が、それぞれ座布団に座って、習字のお稽古をした。指導する教師は年配の女性教師と、若い未亡人の二人であった。若い教師というのは兼松しほで、彼女は、三時に授業が終わると、イング夫人の元にやってきて、英語のレッスンを受けた。イング夫人は交換に日本語を学んだという。

一八七六年一月十五日のバラに宛てた本多の手紙によれば、「イング夫人は彼女のクラス(複数)で一日二時間、快く教え始めた。そこにはたくさんの女生徒がいた」⁶²⁾。

十一月一日の手紙で、イング夫人は、「女生徒の楽しい一団が週に一回、クロージュ編みや編み物などを習いにやってくる。彼女らは少し教えるだけでさっと学び、自主的で、自分の編物針を作り、自分の Yam (cotton) を持ってくる。彼女たちはとても行儀がよく、親切で明るい。彼女たちを教えるのは楽しいことです」⁶³⁾と語り、一八七七年三月十三日の手紙では、「現在、学校の生徒数はおよそ三百名です。二十五名の新しい女生徒が英語の勉強を始めました。

わたしは彼女らを一日置きに教えています」⁶⁴⁾と述べている。彼女は、別の日にはサージェントの第三リーダーを用いた八人の男子生徒のクラスを教えている⁶⁵⁾、とも述べている。

文部省年報によると、明治九年の小学科女子部は私立小学校として記載され、生徒数七十七名、明治十年は一一五名である⁶⁶⁾。これに対し、明治十一年七月の『東奥義塾一覧』によると、同年の女子生徒数は九十二名になっている⁶⁷⁾。また、明治十一年から十四年までの沿革を記した「東奥義塾第二紀沿革略」では、上等小学生女子十六名、下等小学生女子四十七名と書かれている⁶⁸⁾。東奥義塾小学科は明治十五年に廃止された。

小学校女子部の教師

やはり文部省年報には、明治八年の東奥義塾の女性教師を三名と記録し、明治九年と十年の女子小学部の女性教師は四名と記録している⁶⁹⁾。

明治九年一月現在の女性教員は、中田仲、菊池きく、兼松しほの三名である⁷⁰⁾。明治十一年には、上記三名の他に脇山つやが加わり、全員が小学科の教員である⁷¹⁾。前出の『東奥義塾一覧』には小学課に四名の女性教員の名前があり、それによっても、菊池きく、中田仲、兼松志保、脇山つやの四名の名前が確認できる⁷²⁾。これ以降、加わった教員を就職年月日を挙げると、笹森ひさと佐藤そわは明治十一年十一月、工藤さたは明治十二年五月、大和田しなと伊藤みねは明治十三年、松井たまと山鹿もとは明治十四年である⁷³⁾。明治十二年から十三年にかけて東奥義塾の外国人教師であったカール (Robert F. Kerr) のサイン帳⁷⁴⁾には、大和田しな、笹森ひさ、伊東みほ⁷⁵⁾、工藤さた、兼松しほ、中田なか、菊池きくの名前が記されている。

弘前教会での受洗日を挙げてみれば、東奥義塾経営の中心的存在であった菊池九郎の母、菊池きくが明治十年十月七日、脇山つやは明治十一年四月七日、大和田しなが明治十一年十一月六日である⁷⁶⁾。

これらの日本人女性教師と共に女子教育に当たったイング夫人が讃美歌を教えなかったというのは考えられない。と言うか、もしも、讃美歌を教えなかったと考えるなら、その理由としてよほど変わったものを考えなくてはならないであろう。しかし、記録では讃美歌を教えたことと確認するすべはない。これには、メソジスト派の日本ミッション関係のオリジナルの書簡の保存が不完全で、たまたま新聞雑誌等に掲載されたものを除くと、特に女性宣教師らの書簡はまったく見ることができないという事情が関係している。

おわりに

という訳で、讃美歌教育の実際の様子は、明治十五年に函館に開設されたメソジストのミッション・スクール、後の遺愛女学校に関する記録を待たなければならない。寄贈者の名前を冠したキャロライン・ライト夫人記念学校は、開設したものの生徒が集まらず、結局、生徒を弘前に求めなければならなかった。後に全科を卒業した最初の生徒三名はいずれも弘前出身であった。また、兼松しほは、キャロライン・ライト夫人記念学校で有能な教師として働いた。函館に移った彼女はまもなく宣教師に洗礼を受けることを申し出た。こうして、弘前の讃美歌教育は、函館を経由することになった。が、これについては稿を改めて述べることにする。

註

- 1) 笹森建英、今井民子「地方に於ける洋楽の普及—明治期の弘前市における唱歌教育—」(『弘前大

- 学教育学部教科教育研究紀要』第一四号, 1991年)。笹森建英, 今井民子「明治期の和徳小学校の唱歌教育」(『弘前大学教育学部教科教育研究紀要』第一八号, 1993年)。北原かな子「明治期における洋楽受容の過程—津軽を中心に—」(東北大学大学院国際文化研究科, 修士論文, 1994年)。
- 2) 笹森建英「平尾魯仙—画業と著作活動に励んだ文人」『全国の伝承江戸時代 人作り風土記』(組本社, 1992年) 参照。
 - 3) 平尾魯仙『洋夷茗話』(青森県立図書館, 1970年)。
 - 4) 前川公美夫『北海道音楽史』(大空社, 1995年) 18—19頁。
 - 5) 津軽承昭公傳刊行会編『津軽承昭公傳』(歴史図書社, 1976年) 14頁。
 - 6) 中村理平『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説—』(刀水書房, 1990年) 39頁以下参照。
 - 7) 津軽承昭公傳刊行会編, 前掲書, 221頁。
 - 8) 弘前市史編纂委員会編『弘前市史 藩政編』(平文社, 1975年) 526頁。
 - 9) 中村理平, 前掲書, 61頁。
 - 10) 中村理平, 前掲書, 66頁。
 - 11) 津軽承昭公傳刊行会編, 前掲書, 272頁。
 - 12) 『青森県史』(第三卷) 813—814頁。
 - 13) 坂井達朗「幕末・明治初年の弘前藩と慶応義塾—「江戸日記」を史料として—」(『近代日本研究』第十卷, 慶応義塾福沢研究センター, 1993年) 224頁。
 - 14) 中村理平, 前掲書, 55頁。
 - 15) 津軽承昭公傳刊行会編, 前掲書, 315頁。
 - 16) 『青森県史』(第三卷) 901頁。
 - 17) 同上, 902頁。
 - 18) 津軽承昭公傳刊行会編, 前掲書, 303—304頁。
 - 19) 弘前市史編纂委員会編『弘前市史 明治・大正・昭和編』(平文社, 1964年) 258頁。
 - 20) マックレーが弘前に到着した日時は, 現在のところよくわかっていないが, 内務省年報によると, 明治7年3月15日より11月15日まで東奥義塾に雇傭されたことになっている(『内務省年報』復刻版, 三一書房, 1982, 334頁)。なお, マックレーについては, 北原かな子「若き米国人教師と明治初期弘前—アーサー・C.マックレー『日本からの書簡集』より—」(『英学史研究』第30号, 日本英学史学会, 1997, 61—72頁) 参照。
 - 21) “About the only things here that reminds me of civilization is the castle. There is something very inspiring in the lively notes of the bugle that make the entire place vocal in the morning, at noon, and at sundown.” Maclay, A. C. A Budget of Letters form Japan. New York : A. C. Armstrong & Son, 1886. p.57. なお, 北原かな子「A. C.マックレーと明治初期の弘前城—『日本からの書簡集』より—」(『弘前大学国史研究』第102巻, 1997年) 102頁参照。
 - 22) 東奥義塾は給与面一つとっても外国人教師を優遇した。たとえばヴォルフ夫妻に支払われた給料は月額250円である。ヴォルフが在職していた明治六年当時の「東奥義塾入費元拂精算帳」によると, 開校式が行われた二月時点でのヴォルフ以外の教師給料総額は138円50銭である。このとき東奥義塾の教師は, 幹事(現在で言う校長に当たる), 教授から計算係まで, 総計40名を越していた。平均して3円を僅かに超える程度のものであったことになる。また, 当時東奥義塾教師であった高山静は, 開学時の学校幹事であった兼松成言に7円の給料も支払えなかった事情を伝えている(長谷川虎次郎『菊池九郎先生小傳』菊池九郎先生建碑會, 昭和10年, 162頁)。外国人教師

に比して日本人の教師達がいかに薄給に甘んじたかがわかる。

- 23) John Ing's letter to his parents and sisters, 1974. 12. 23. なお, 山本博「ジョン・イングと弘前バンド」(『文化紀要』第26号, 1987年) 11-13頁参照。
- 24) "After a trip of 3 weeks by slow steamer and an overland trip by palanquin, the Ings John, Lucy, and little Johnny plus an orphan boy they had brought with them from china arrived in Hirosaki, Japan. Bascom, G. E. The Johnny Applesseed of Japan (Biography of John Ing, Missionary), unpublished manuscript, p.4. 山本博, 同上, 13頁参照。
- 25) 手代木俊一「ジョージ・オルチン師の日本における讃美歌全訳」(『フェリス論叢』第第二三号巻, 1986年) 18頁。
- 26) 岡田哲蔵『本多庸一傳』(日独書院株式会社, 1935年) 45頁。
- 27) 秋山憲兄『覆刻明治初期讃美歌解説』(新教出版社, 1978年) 72-74頁。
- 28) 石川一雄「コーネル大学所蔵「讃美のうた」について“Sanbi no Uta” and the “Phantom Hymnal” of 1873」(『国立音楽大学研究紀要』第15号, 1980年)。
- 29) 秋山憲兄, 前掲書, 19頁。
- 30) 石川一雄, 前掲論文, 29頁。
- 31) 秋山憲兄, 前掲書, 84頁。
- 32) 『讃美歌一』(復刻版) 参照。
- 33) 弘前教会創立以来100年間の受洗者名簿』(1975年) 2頁。
- 34) 大下英二『弘前教会百年小史』(日本キリスト教団弘前教会, 1983年) 17頁。
- 35) Ing, Mrs. "More from Japan. "Greencastle Banner, August 5, 1875. なお, 掲載されているイング夫人の書簡の日付は, 1875年6月15日。なお, 山本博, 前掲論文, 16頁参照。
- 36) 「オルチン文庫目録」, 秋山憲兄, 前掲書所収, 19頁。
- 37) 石川一雄, 前掲論文, 29頁。
- 38) 高木武夫『弘前教会五拾年略史』(日本メソヂスト弘前教会, 1903年) 282-283頁。
- 39) 秋山憲兄, 前掲(36), 石川一雄, 前掲論文, 29頁。
- 40) 岸田吟香「御巡幸ノ記」(『東京日々新聞』明治9年7月24日, 第1389号附録)
- 41) 同上。この東奥義塾の天覧授業に関する岸田吟香の文章は, 『弘前市教育史』115-117頁にも掲載されている。ただし, 同書では出典が『東京日々新聞』明治9年7月20日と誤記されている。
- 42) 笹森順造『東奥義塾再興十年史』(東奥義塾學友会, 1931年) 17頁。
- 43) 岸田吟香, 前掲記事。
- 44) 「御巡幸記事」(『朝野新聞』明治9年7月23日, 第869号)
- 45) 笹森順造, 前掲書, 160頁。
- 46) 岸田吟香, 前掲記事。
- 47) 石川一雄, 前掲論文, 29頁。及び「讃美歌539番」, 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌・讃美歌第二編』(日本基督教団, 1986年) 所収。
- 48) 石川一雄, 前掲論文, 29頁。
- 49) 高木武夫, 前掲書, 5頁。
- 50) 高木武夫, 前掲書, 284頁。
- 51) 『弘前教会日曜学費記録』。
- 52) 『弘前教会日曜学費記録』の1877年7月29日の日誌。

- 53) 『弘前教會日曜學費記録』の1878年1月13日の日誌。
- 54) 大下英二『弘前教会百年小史』(日本キリスト教団弘前教会, 1983年) 27頁。
- 55) Ing, Lucy E. Hawley, Record of Mission Activities.
- 56) “In memory of Mrs. Ing.” Heathen Woman’s Friend, September 1881, pp. 59–60. なお, 大木英二『弘前教会について—創立から明治十九年まで—』(キリスト教史談会パンフレット/) (キリスト教史談会, 1980年) 15–17頁参照。
- 57) Ing, Lucy E. Hawley, Record of Mission Activities.
- 58) 手稿「東奥義塾来歴」, 頁数の記載なし。現在東奥義塾に残されているこの「東奥義塾来歴」手稿本は, 『東奥義塾一覧』所収の「東奥義塾来歴」部分と極めて内容が似ており, その原文と推定される。明治11年3月11日に開業した東奥義塾中学科の開業式で, 教員兼松良(かねまつとどむ)が, 「変遷来歴を書きつづりて朗読」(北斗新聞, 明治11年3月28日, 『新聞記事に見る青森県日記百年史』東奥日報社, S53.1.20, p78所収) しているため, そのときの原稿とも考えられる。この内容は, 若干の内容を補足しつつ, その後幾度か書かれた沿革史に多く引用された。また, 笹森順造『東奥義塾再興十年史』(東奥義塾學友会, 1931年) 16頁参照。
- 59) 同上「東奥義塾来歴」, 頁数の記載なし。ただし, 明治4年から明治18年までの弘前の様子を記した『津軽長尾日記抄』(市立函館図書館所蔵)の1月12日の部分では, 1月8日より東奥義塾小学校が開校したことと共に, 「五月十五日の條 義塾に女学校を取り設け候よし」との一文が付けられている。この日付は, 「東奥義塾来歴」の内容と一致しないが, 「津軽長尾日記抄」自体が, すでに長尾周庸の日記を抜粋したものであり, 原文の所在がわからないため, 現在のところこれ以上の確認ができていない。
- 60) 『文部省第3年報』復刻版(宣文堂, 昭和39年) 616頁。なお, 本多繁「明治前期における東奥義塾の意義—学校と教会と地域—」(『宣教研究』第3号, 1969年) 136頁参照。
- 61) “I went in to visit the girls school the other day ; the room had been prepared by removing the sliding doors between two rooms, thus throwing three into one. One side is formed, entirely of three doors or windows, opening on a veranda, and could all be removed ; also, the other side opening into a large unoccupied room. I think these sliding doors wonderfully convenient. Twenty girls, large and small, were seated on twenty broad, low benches. It was writing hour, and superintended by their two teachers, they were making queer characters with their brush pens. They looked very happy. One teacher, an elderly lady, the other a young widow, both nicely dressed and very lady-like in manners, and bare-footed, as were the girls. Just without the door were many wooden shoes. I wonder how one owner can find her shoes in such a lot and so much alike ; but he or she can.
Mrs. Kanematsu, the younger teacher, is comming each day at 3p. m. (the hour when school is dismissed), to take a lessons in English, in exchange for which, she is to teach me Japanese, if I can learn. It is a beautiful language.” Ing, Mrs. “More from Japan.” ibid.
- 62) “Mrs. Ing commenced to teach freely two hours in a dy in her classes more girls are there” Y. Honda’s letter to Ballagh, 1876.1.15. なお, 本多繁『続・米国のプロテスタンティズムと日本人』(明治プロテスタンティズム研究所, 1994年) 122頁参照。
- 63) “A Merry group of school girls come in once a week to learn crocheting, knitting etc.. They learn very rapidly with little help, are quite independent, making their own needles, and

- bringing their own yam (cotton). they are so polite, kind and pleasant it is a pleasure to teach them.” Letter from Japan, by Mrs. Lucy H Ing. “Greencastle Banner, Feb. 1 1877.
- 64) “The school now numbers about 300 ; 25new girls begin English. I have had them every other day” Education in Japan. An extract from Mrs. Lucy Ing’s letter of March 13, 1877.” Greencastle Banner, May, 17 1877.
- 65) “Sargent’s third reader is a fine book. I have a class of eight men in that every other day.” Ibid.
- 66) 『文部省第4年報』復刻版(宣文堂, 昭和40年)1085頁, 及び『文部省第5年報』復刻版(宣文堂, 昭和40年)1122頁。なお, 本多繁, 前掲論文, 136頁には, 明治十三年と十四年の女子生徒数が, それぞれ七〇名, 七十九名となっているが, 出典は明記されていない。
- 67) 『東奥義塾一覧』明治十一年, 東奥義塾, 40-41頁。
- 68) 「東奥義塾第二紀沿革略」刊行年等不明
- 69) 前掲『文部省第3年報』, 『文部省第4年報』, 『文部省第5年報』。
- 70) 『弘前市立弘前中学東奥義塾沿革誌』(弘前市立弘前中学東奥義塾, 1908年) 27頁。
- 71) 同上, 29頁。
- 72) 前掲『東奥義塾一覧』, 38頁。
- 73) 前掲『弘前市立弘前中学東奥義塾沿革誌』, 29-30頁。
- 74) このサイン帳は, 現在アメリカ, Indiana州 Greencastleの DePauw University,に残されているもので, 明治13年に財政事情のためやむなく解雇せざるを得なかったロバート・F.カール(Robert F. Kerr)に, 当時の東奥義塾職員や生徒達が感謝の言葉などを寄せたノートである。特にタイトルなどはないが, 表紙に T. Okitsu と書かれている。
- 75) 「伊東みほ」は, 例えば『東奥義塾再興十年史』などでは, 「伊藤」になっているなど, 名前の表記に若干の不一致が見られる。しかし, このカールへの寄せ書きでは, 「伊東みほ」と書かれている。このサイン帳はおそらく自筆と思われるため, 「伊東みほ」が正しい表記と考えられる。
- 76) 前掲『弘前教会創立以来100年間の受洗者名簿』, 2頁。

(1998.1.5受理)